「小さな群れよ、恐れるな」（ルカによる福音書一二章二二～三四節）

1　正しい心配、間違った心配

今日の箇所は、マタイによる福音書の、有名な「山上の説教」にある箇所（六・二五以下）と重なっています。

ルカの今日の箇所から、山上の説教の聖句を、いくつも思い出すという方も多いと思います。

マタイとルカ、もちろん全部が同じというわけではありません。ルカの今日の箇所には「烏」（からす）が出てきます。マタイの山上の説教では「空の鳥」となっています。

とくに大きな違いは、終わりの数節です。「小さい群れよ、恐れるな」（三二節）以下です。この終わりのところは、マタイでは別の箇所（六・一九以下）にあって、それが、ルカではここで一緒にされています。

しかし、マタイとルカ、全体として、「思い悩むな」という命令の言葉が、基本の調べであることは確かです。

「思い悩む」というこの言葉、昔の口語訳聖書では「思いわずらう」と訳されていた言葉です。思い悩む、にしても、思いわずらう、にしても、一般には良い意味とは受けとられないでしょうけれど、この言葉自体は、〈心配する〉という意味で、特別な言葉ではなく、新約聖書でよく使われます。

例えばパウロは、コリントの信徒への手紙二で、私には教会の「心配事」がたくさんある、誰か弱っているなら、私も弱らないでいられない、誰かがつまづくなら、私も心燃やさないでいられないと書いています（一一・二九）。

こうした心配、心配り、あるいは配慮に対して、そうでない心配もあります。不信仰の心配、とでもいったらよいでしょうか、間違った心配です、たいていは自分に関しての、正しくない心配、思いわずらいです。そういう心配に対してイエスは、心配するな、つまり思い悩むなと言っているのです。

この、私どもマタイの山上の説教によってよく知っている箇所、ルカでは、前後関係からして、直前の、先週私どもが学んだ、あの「愚かな金持ち」（一六～二一）のたとえと関係があります。

「愚かな金持ち」のたとえと今日の箇所。今日の箇所の最初と最後に注意しただけでも、関連は明らかです。

まず、今日の箇所のはじめです。イエスがこう言って語り出したことが書いてあります。

> それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく・・・」（二二節）。

この「〈だから〉、言っておく」です。それは、「愚かな金持ち」のようにならな

いように、言っておくという意味です。
もう一つ、今度は、今日の箇所の終わりのところです。「富を天に積みなさい」（三三節）。
「愚かな金持ち」のたとえの最後でイエスは、この金持ちは、自分のためには富を積んだかも知れないが、神の前に豊かになることはなかった（二一節）と言っていました。富を天に積むことを彼はしなかった。これに対してイエスは今日の箇所で、弟子たちに、天に富を積む、天に宝を積むことを教えているのです。
その他にも、いくつもあります。今日の箇所を読み進める中で、取り上げることになります。

2　弟子たちへの教え

いま「愚かな金持ち」のたとえを念頭において、今日の箇所は読むことができると申し上げました。
「愚かな金持ち」のたとえとは、こうでした。一人の金持ちがいました。彼の畑が豊作で、それまでもお金持ちだったのですが、もっとお金持ちになるチャンスが訪れたのです。
自分の豊かさ、富をいろいろ利用する道はあったのでしょうけれど、彼はそれを自分だけの幸せのために使おうとします。それを蓄えておいて、働かないで生きて行けるようにしようと考えたのです。今まであった倉も壊し、新しい、もっと大きな倉を建て、穀物も財産もみなしまい込んで、自分にこう言うのだというのです。さあ、一休みし、食べたり飲んだりして、楽しめ、と。もちろん、これらは、みな、まだ彼の心の中のことです。
ところが、そう思った、その晩、神は彼に言うのです。「愚か者よ、お前の命は取り上げられる」と。彼は、神によって命をとられます。すべてはお仕舞い。生と死の主、神のことは、彼の頭に少しもなかったのです。
これを受けて、イエスは弟子たちにこう言っています。

命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。烏のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は烏を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか」（二二～二六節）。

いま申し上げたように、これらは弟子たちに語られたものですが、イエスが話の中で、思い悩んでいる人、心配している人と、語っているのは、さっきの愚かな金持ちのことであったように思います。
何を食べようか、何を着ようかと、いわば、ぜいたくな選択を想定し、思い悩んで

います。それはあの金持ちのことです。彼は、「食べたり飲んだりして」楽しもうとしていたのです。彼は、食べたり飲んだりするのが人生だと考えて、あれこれ心配っていたのだと思います。

またたとえの金持ちは、「納屋」どころか、新しく、いままでより大きな「倉」を建てて、それにすべてを詰め込んで、その財産をもって、人生の拠り所としようとしていました。

しかしイエスは、「烏」という、当時としては、がつがつした不浄な鳥と見なされていた「烏」を持ち出して、神様から許され、ゆうゆうと生きている烏よりも下だと言われたのです。

命だってそうです。あの金持ちは、自分が、当然のことながら、生きて、幸せになると決めてかかっていました。しかしだれが、命を保証したというのでしょうか。「寿命」をだれも伸ばすことはできないのです。

こうしてイエスは、あの金持ちのようでない生き方を、彼とは反対の生き方をするように弟子たちに教えているのです。それは、神様から、創造主である神から与えられた命、それを感謝して受けとめ、貸し与えられた生を、私に与えられた務めを、大切にする生き方にほかなりません。

そうした、思い悩むことなく生きる生き方、在り方を、人間に教えているものがあります。イエスはそれに目を留めるように言うのです。

野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きをせず紡ぎもしない。しかし、言っておく、栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ（二七～二八節）。

先ほどの空の鳥、すなわち「烏」、そして、ここに上げられている「野の花」（口語訳、聖書協会共同訳）、ふだん見過ごしてしまっているこれらは、私どもにとり、まさに「沈黙の教師」（キルケゴール）です。

この「野」の草は、貧しい人たちが、これを乾燥させて、燃料に用いていたものです。それほどに、はかない、まるで何の価値もないようなものです。しかし神はこれを装ってくださっています。それには、あのソロモンの栄華さえ及ばなかったというのです。

野の花は、空の鳥、烏と同じく、神の養いに依存しています。「働きもせず紡ぎもしない」。これは、二つとも女性の仕事をさしている言葉のようです。それすらしない。何もしない。しかし神は今日も美しく装ってくださるのです。天の父の恵みに生かされて生きること、この究極の事実を、これら沈黙の教師たちは私どもに語り、教えてやまないのです。

この沈黙の教師たちに学ぶ私どもが、知らなければならないもう一つのことは、烏や野の花よりも、私ども人間は、はるかに「価値ある」（二四節）ものだということです。

鳥や野の花は、もちろん思い悩んだりしない、心配したりしない。それに対して人間は確かに思い悩みます。しかし人間が思い悩み、神ならざるものに心引かれ、不信仰に陥るということは、反対に、それからもう一度神へと立ち返り、神を第一にする生活へと前進することができるということです。そこに、私ども人間の、他の被造物とは違う価値があるのです。

3　待ちつつ、急ぎつつ

さて今日は、山上の説教にもあるイエスの教えを、ルカに従い「愚かな金持ち」のたとえと関連させて読んでいます。

今日の箇所の最後のところは、マタイにはない、私どもの理解にとっては、重要な、この箇所の結論ともいうべきところです。

ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ（三一～三四節）。

神の国、国とは、特定の場所のことではなく、ご承知のように、神の支配という意味です。それを私どもは求める。そうすれば、父は喜んで神の国をくださると、イエスは約束しています。

しかし同時にここで私どもが、しっかり聞かなくてならないのは、神の国は、与えられるだけではない。私どもの積極的な奉仕を、行為を求めるということです。マタイの山上の説教は、神の国を求めよ、そうすれば、自余のすべては〈与えられる〉で終わっていました（六・三三）。

しかしルカではそうではないのです。ここに「自分の持ち物を売り払って施しなさい」とあります。この「持ち物」という言葉、これは、じつは「愚かな金持ち」のところで、「人の命は財産によってどうすることもできない」（一五節）というところにある「財産」という言葉と同じです。

愚かな金持ちは、人の命は「財産」（持ち物）によって何とでもできると考えておりました。彼は、財産に、持ち物に、執着しました。それが生涯幸せになる道だと考えたからです。その生き方は、しかし、イエスによって、そのたとえを通して完全に否定されました。

イエスの教えによれば、生涯幸せになる道は、私どもが、私どもの持っている物、財産を、それが何であれ、多くても少なくても、互いに分け合うところに開かれるのです。そこに神の国はなります。小さな群れ、教会は、そのような生き方を志す群れです。たとえ、どんなに小さくても、恐れることはないのです。そこに神の国があるからです。その神の国が、やがてはっきりと明け初める時を待ちつつ、私どもも奉仕しつつ歩んでいくのです。

（一月一六日）